

第73回
東北地区中学校長会研究協議会
福島大会報告

と き 令和5年6月30日(金)
ところ 会津若松ワシントンホテル



目 次

■東北地区中学校長会 宣言・決議	2
■大会主題・趣旨	3
■大会日程・運営	4
■あいさつ	
東北地区中学校長会 会長 福 地 裕 之	6
全日本中学校長会 会長 齊 藤 正 富	7
■研究協議会 分科会報告	
第Ⅰ分科会 秋田県 鹿角市立尾去沢中学校 松 尾 弘	8
青森県 むつ市立むつ中学校 俣 田 登	9
第Ⅱ分科会 福島県 小野町立小野中学校 富 岡 泰 成	10
宮城県 気仙沼市立鹿折中学校 亀 谷 寿 之	11
第Ⅲ分科会 岩手県 一戸町立一戸中学校 佐々木 由貴子	12
山形県 飯豊町立飯豊中学校 金 田 孝 善	14
■記念講演	
演題 不透明かつ分断の時代における校長のリーダーシップを考える ～東日本大震災・コロナ禍の先へと向かう東北教育界のリーダーたちへのエール～	
講師 高 橋 洋 平 氏	16
■次期開催県代表あいさつ	
岩手県中学校長会 会長 中 屋 豊	28
■編集後記	29
■資 料	
東北中学校長会研究協議会福島県大会役員名簿	30

令和5年度 東北地区中学校長会 宣言・決議

宣 言

今日、我が国の教育は人格の完成を目指し、伝統と文化を尊重するとともに、豊かな人間関係で満たされる持続可能な社会を創るたくましい日本人を育成する使命を担っている。

私たちは、自然災害や新たな感染症の発生、グローバル化の進展や急速な技術革新など社会状況が変化する中、新しい時代の中学校教育の課題に対応し、教育基本法をはじめとする教育関連法規や学習指導要領の趣旨を踏まえ、自らの責任において全日中新教育ビジョンに基づく学校からの教育改革を推進し、教育の真価を示さなければならない。

東北地区中学校長会は、教育改革の推進と当面する諸課題の解決に努め、新たな中学校教育の創造を目指し、東北各県民の負託に応えることを宣言する。

決 議

第73回東北地区中学校長会研究協議会福島大会にあたり、以下の事項を決議し、その実現を期する。

- 一、人間尊重の精神に徹し、「社会を生き抜く力」とともに「よりよい社会を形成する力」を育む教育を推進する。
- 一、全日中新教育ビジョンを踏まえ、学習指導要領に基づく特色ある教育課程を編成・実施・評価・改善し、確かな学力の定着、豊かな心と健やかな体の育成を推進する。
- 一、現在の学校教育課題に即した研修を充実し、教職員の資質・能力の向上と使命感の高揚に努める。
- 一、創意ある教育活動を展開し、家庭・地域社会の信頼に応える教育を実現するため、人的措置をはじめ確固とした教育条件の整備・充実を期する。
- 一、「教科書無償給与制度」「義務教育費国庫負担制度」及び「人材確保法」の堅持を要請し、教育水準の維持向上を期する。
- 一、新しい時代に求められる学校づくりに向けてリーダーシップを発揮するとともに、「学校における働き方改革の推進」「教職員の勤務実態を踏まえた環境整備」を要請し、有効かつ持続可能な指導・運営体制の構築を期する。
- 一、東日本大震災及び原子力発電所事故をはじめ近年多発する災害等により被害を受けた地域の復興を期し、教育活動の充実に向けた支援と防災教育・安全教育の更なる充実に努め、継続して東北6県校長が連携・協力する。

令和5年6月30日
東北地区中学校長会

令和5年度 第73回 東北地区中学校長会研究協議会 福島大会

1 大会主題

新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく日本人を育てる中学校教育

2 趣 旨

激動する国際社会においては、持続可能な社会を構築するための動きが日々進行しており、教育界も様々な教育改革、そして、「社会に開かれた教育課程」及び、「主体的・対話的で深い学び」の実現、「カリキュラム・マネジメント」の確立等が求められている。

そのため、私たちは学校教育の課題を踏まえ、子供たちの「社会を生き抜く力」と「よりよい社会を形成する力」を育むとともに、Society 5.0時代の到来を見据えた人材育成など、学校からの教育改革を推進していかなければならない。併せて、学校における働き方改革の推進や新型コロナウイルス感染症の対策を講じながら、校長のリーダーシップのもと、全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びや協働的な学びの実現など、予想不可能な社会の変化に対応できる、まさに我々の力量が問われていると言える。

本研究協議会では、これまでの研究の積み重ねを基盤として、東北地区中学校長会の英知と創造を結集し、「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく日本人を育てる中学校教育」の大会主題のもと、その具体的な方策を究明し、未来社会を創り出す「生きる力」を育む教育を推進する中学校教育の一層の充実に努めるものである。

また、東日本大震災及び原子力発電所事故より12年の星霜を重ねた復興の歩みや、防災教育・安全教育の成果を踏まえ、今後起こりうる災害に対して能動的に対応できる生徒の育成も目指すことにより、東北地区中学校教育の一層の充実・発展に期するものである。

3 主 催 東北地区中学校長会 福島県中学校長会

4 後 援 全日本中学校長会 福島県 会津若松市 福島県教育委員会 会津若松市教育委員会 福島県市町村教育委員会連絡協議会 福島県小学校長会 公益財団法人 日本教育公務員弘済会福島支部

日程・運営について

1 会 場 会津若松ワシントンホテル

〔〒965-0024 福島県会津若松市白虎町201〕 Tel 0242-22-6111

2 日 程 令和5年6月30日（金）

10:00	10:30	11:50	13:10	15:00	15:30
諸準備・受付	開会行事	記念講演 〔80分〕	昼食・休憩	研究協議会 （分科会） 〔110分〕	閉会行事

(1) 開会式【双鶴】 10:00～10:20

- ① 開式のことば
- ② 国歌斉唱
- ③ 大会会長あいさつ
- ④ 祝辞（全日本中学校長会会長）
- ⑤ 祝電披露・感謝状贈呈
- ⑥ 閉式のことば

(2) 理事会報告、宣言・決議【双鶴】 10:20～10:30

(3) 記念講演【双鶴】 10:30～11:50

(4) 研究協議 13:10～15:00

【第Ⅰ分科会：双鶴西 第Ⅱ分科会：飛翔東 第Ⅲ分科会：飛翔西】

(5) 閉会式【双鶴】 15:00～15:30

- ① 開式のことば
- ② 大会実行委員長あいさつ
- ③ 次期開催県あいさつ（岩手県）
- ④ 閉式のことば

※【 】は、会津若松ワシントンホテル内の各会場

3 HYBRID方式による運営について

(1) 全体会（開・閉会行事 理事会報告、宣言・決議 記念講演）について

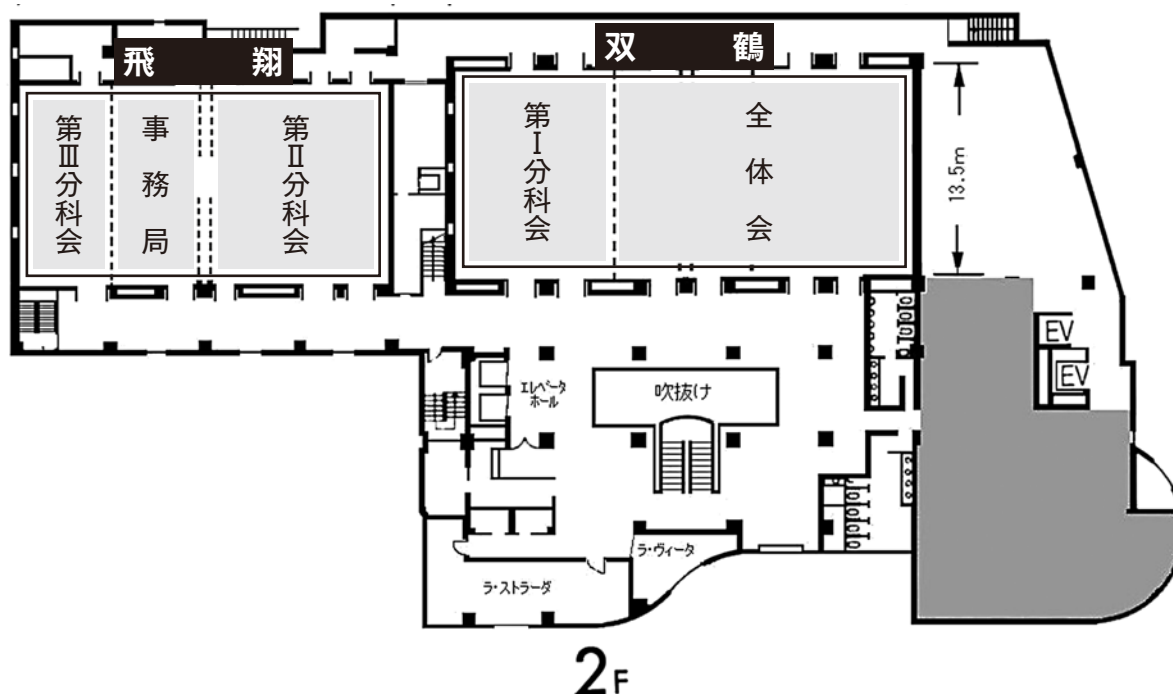
- ① 会津若松会場カメラ撮影（実況LIVE）、Zoomとの併用で運営する。
- ② 参加者数 会津若松会場参集者約100名＋Web参加会員約750名＝合計約850名
- ③ 会津若松会場参集者・・・東北地区中学校長会理事等（全日中会長、会長、副会長、次年度幹事 等）、分科会発表者及び司会者、会津地区運営関係者 等

(2) オンラインによる研究協議（分科会）の内容・進行について

分科会は、各分科会とも2県からの発表を続けて行い、その後グループ協議とする。

13:10	13:55	14:05	14:20	15:00
○開会・係紹介 ○司会者あいさつ〔5分〕 発表Ⅰ・Ⅱ 〔各20分〕	休 憩 〔10分〕	質 疑 応 答 〔15分〕	グループ協議〔40分〕 ・協 議〔30分〕 ・まとめ〔10分〕	

会 場 図（会津若松ワシントンホテル内）





あ い さ つ

東北地区中学校長会

会長 福地 裕之

第73回東北地区中学校長会研究協議会福島大会が歴史と文化の街、そして、ICTを活用した「スマートシティ構想」を推進している会津若松市を会場として、現地参加とWeb参加のハイブリッド型による開催を迎えることができました。

ある生徒の「言葉」を紹介します。

「夢」

福島に生まれて、
福島に育って、
福島で働いて、

福島で結婚して、
福島で子どもを産んで、
福島で子どもを育てて、

福島で孫を見て、
福島でひ孫を見て、
福島で最期を過ごす。
それが私の夢なのです。

これは、平成23年3月の東日本大震災・原子力発電所事故のわずか5か月後に行われた「第35回全国高等学校総合文化祭」において本県の高校生から発せられた言葉であり、多くの福島県民が勇気付けられました。

これまで、福島県中学校長会においては、「学校は、復興のシンボルであり、復興の活力源である」こと、そして、「学校は、命と健康が輝く場所である」ことを肝に銘じ、学校経営の最高責任者である校長がリーダーシップを発揮し、新たな時代を切り拓く、子どもたちを育てようを合言葉に私たちの英知を結集して取り組んできました。

この間、全国各地から心温まるご支援をいただいたことは未来永劫にわたって忘れてはいけないことだと思っています。

さて、前回の福島大会は震災後の3年3か月余りが経過した9年前の開催でした。福島県総合計画の基本目標が「夢・希望・笑顔に満ちた“新生ふくしま”」で、現在は「やさしさ、すこやかさ、おいしさあふれるふくしまを共に創り、つなぐ」とし、『「福島ならではの教育の充実」を掲げています。

本大会の大会主題は「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく日本人を育てる中学校教育」です。「新たな教師の学びの姿」の実現に向けて、「令和の日本型学校教育」を担うため、私たちは学校教育の課題を踏まえ、子供たちの「社会を生き抜く力」と「よりよい社会を形成する力」を育むとともに、Society 5.0時代の到来を見据えた人材育成など、学校からの教育改革を推進していかなければなりません。併せて、学校における働き方改革の推進や新型コロナウイルス感染症の対策を講じながら、校長のリーダーシップのもと、全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びや協働的な学びの実現など、予測不可能な社会の変化に対応できるよう、まさに私たちの力量が問われていると言えます。

今こそ「東北はひとつ」の精神で、東北人持ち前の粘り強い実直な気質と、東日本大震災及び原子力発電所事故からの復興・創生や近年多発する災害など様々な困難をも克服してきた自負を胸に、あらためて絆を深めていきたいと思います。また、各学校の課題解決や学校経営の改善に向けた方策や手がかりを見出す貴重な機会となりますよう期待しているところです。

福島県は、初夏にサクランボ、真夏にはモモ、秋はナシやブドウ、そして、初冬のリンゴなど、まさに「くだもの王国」であり、全国新酒鑑評会で金賞受賞数9回連続日本一になるなど、「日本酒」の美味さもまた一つの魅力となっています。大会の記憶とともに、福島のおいしさも味わっていただきたいと願っております。

結びになりますが、本大会開催にあたり特段のご理解ご支援を賜りました全日本中学校長会会長様はじめ東北地区中学校長会及び事務局の皆様、また、ご後援をいただきました福島県、会津若松市、福島県教育委員会、会津若松市教育委員会、福島県市町村教育委員会連絡協議会、福島県小学校長会の皆様様に心より感謝を申し上げ、挨拶いたします。



令和5年度東北地区中学校長会研究協議会 福島大会によせて

全日本中学校長会

会長 齊 藤 正 富

第73回東北地区中学校長会研究協議会福島大会が開催されますこと、皆様とともに喜びたいと存じます。また、この間、コロナ禍であっても「学びを止めない」という考えを実践し、研究協議会が実施されてきたことについて敬意を表します。それぞれの年度とも開催に当たっては、域内における新型コロナウイルスの感染状況等を踏まえつつ、感染予防対策を組み込んだ計画の策定やその変更など、大変な御苦勞があったことと存じます。今回の本大会開催に向けて準備を進めてこられました東北地区中学校長会会長である福地裕之様、福島大会実行委員会委員長である長谷川浩文様、東北地区中学校長会、福島県中学校長会の皆様に心より敬意を表するとともに、御支援・御指導を賜りました文部科学省、福島県、福島県教育委員会、会津若松市、会津若松市教育委員会、福島県市町村教育委員会連絡協議会、福島県小学校長会など、多くの皆様に深く感謝申し上げます。

さて、令和5年3月に文部科学省より示された「次期教育振興基本計画」は、教育の普遍的な使命を果たすために、予測困難な時代における教育の方向性が示されております。具体的には、2040年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手を育成し、日本社会に根ざしたウェルビーイングの向上を図るために、グローバル化する社会の持続的な発展に向けて学び続ける人材の育成、誰一人取り残さず、全ての人の可能性を引き出す共生社会の実現に向けた教育の推進、地域や社会で共に学び支え合う社会の実現に向けた教育の推進、教育デジタルトランスフォーメーション（DX）の推進と計画の実効性を確保するための基盤整備・対話を示しており、「令和の日本型学校教育」をさらに進めて、全国の校長先生方が進めている「個に応じた指導の充実」「個別最適な学びと協働的な学びの実現」「ICTの活用」などへの適切な対応のために、カリキュラム・マネジメント、外部人材等による協力体制の確立などにおける管理職によるリーダーシップの発揮にとどまらず、「教員免許更新制」の発展的解消に伴い、これからの時代に必要な教師の学びを実現する「新たな研修システム」への適正な移行を推進させるべく、教師と対話をしながら、計画的・効果的な研修の受講を実現し、これからの教育の推進に向けた原動力となる教師を育成することも管理職としての大きな役割となります。こうした新たな時代の教育の推進、それを支える教師の育成が私たち管理職に委ねられております。このような状況にある中、「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を作り出していく日本人を育てる中学校教育」を大会主題に掲げて開催される研究協議会福島大会が、今後の学校教育の更なる前進に寄与することを期待しております。

結びに、東北地区中学校長会が、益々充実・発展されますこと、また、会員の皆様一人一人の更なる御活躍を祈念しまして、挨拶とさせていただきます。

分科会報告



〔発表1〕

共同研究による運動好きの生徒を育む組織的な取組

秋田県鹿角市立尾去沢中学校 松尾 弘

Ⅰ はじめに

秋田県が目指す「豊かな人間性を育む学校教育」の重点の一つに「心と体を鍛える」がある。中学校部活動の地域移行が進む昨今ではあるが、学校では、いかにして生徒たちが運動することの意義を理解し、運動する機会を見つけ、運動を好んで行うようになるかを追求していくことが重要となる。

最終的には、生涯にわたって健康で安全な生活と豊かなスポーツライフを実現していくことが求められている。



Ⅱ 研究の目的

学校間の連携した取組や関係機関との連携により、運動好きの生徒を育む組織的な取組を構築する。

Ⅲ 研究の実際

1 学校間連携による実践（3プロジェクト）

(1)体の動かし方やけが予防の講演会

効果的な体の動かし方や柔軟性を高めるために、実技も含めた講演会を実施した。

(2)チャレンジデーでの長縄跳び対抗戦

生徒たちが意欲をもって楽しんで運動に取り組むために、鹿角地区の中学校全学級対抗の長縄跳び大会を企画した。

(3)個々の運動目標への1人1チャレンジ

自分が決めた運動を、毎日継続することを第一として行った。

2 各校の実態に応じた取組

(1)保健体育科における体力向上

- ①授業のウォーミングアップで、体力テストの結果で落ち込んでいる種目を実施した。
- ②保健体育科通信等により新体力テストの結果を共有し、運動の大切さや体力向上への意識を高めた。

(2)生徒会主催のスポーツレクリエーション

- ①運動する楽しさを味わわせながら生徒たちの親睦を深めた。
- ②いじめ防止啓発活動の一環として取組を進める学校もあった。

Ⅳ 成果と課題

1 成果

- (1)各校の経営の重点に体力向上を掲げたことで、生徒や教職員の意識を高めることができ、活動の充実につながった。
- (2)学校間連携による実践（3プロジェクト）を通して、生徒たちの意欲を喚起することにつながった。

2 課題

- (1)運動嫌いの生徒を減らし、運動好きの生徒を増やしていくには、勝敗にこだわらず楽しんで行える運動を継続していく必要がある。
- (2)少子化に伴い学校単独での部活動が困難になり、生徒の選択肢が少なくなっている。今後は、生徒たちの興味に応じたスポーツ団体の立ち上げを働きかけていく必要がある。

【研究協議】

質問1（岩手県）

「文化部に所属している生徒はどのように運動に取り組んでいるか。」

回答（秋田県 松尾）

「吹奏楽部に所属している生徒は軽いランニング等の運動をしているが、他の文化部の生徒はほとんど運動していない実態であった。週末にランニングや腹筋等の軽い運動を各部の実態に合わせて、短時間であるが実践に取り組んだ。」

〔発表2〕

健康で安全な生活と豊かなスポーツライフを
実現するための学校経営の在り方

～それぞれの学校の健康課題に

地区中学校長会としていかに取り組むか～

青森県むつ市立むつ中学校 俣田 登

Ⅰ はじめに

豊かな大地とそれを取り巻く海、豊かな自然に恵まれた風光明媚な土地であり、大間のマグロに象徴される豊穡な海の恵みにあふれたところである。古い民族文化とそれを支える温かく純朴な人々の住むこの下北地域ではあるが、過疎化、少子化の問題が大きな影を落としている。



Ⅱ 研究の概要

1 1年次（令和2年度）

研究を始めるにあたりアンケートを実施し、研究の方向性を二点にした。

(1)課題の焦点化→「一点突破方式」

(2)指導体制の組織化

2 2年次（令和3年度）

(1)アンケート調査の実施

アンケート項目の整理と下北地域特有の健康課題についてアンケート調査を行った。課題の焦点化と共有、そして成果を感じられる取組が、健康教育を進めるカギとなることが確認できた。

(2)「健康課題解決のための計画書」の作成

アンケートをもとに「健康課題解決のための計画書」を作成した。具体的な「目指す生徒の姿」や数値目標を設定するようにした。

3 3年次（令和4年度）

(1)家庭との連携を図った事例（むつ市立大湊中学校）

朝食の欠食率が高いという生徒の実態から、朝食にスポットを当てて指導を行った。保健師や栄養士を招いて食育教室を実施した。

(2)指導の組織化を図った事例（むつ市立川内小・中学校）

スマートフォンなどの使い方に課題があり、小学校では保護者対象に、中学校では生徒対象に教室を開いた。

(3)これまでの取組を広げた事例（むつ市立近川中学校）

アンケートと結果から、「生活リズムの改善」と「齲歯保有率の低減」に、標語コンクールを行うなどして意識を高めた。

(4)生徒会の活動に落とし込んだ事例（むつ市立大畑中学校）

睡眠時間確保と情報機器の利用時間削減による生活習慣の改善を「Ohata Style」と名付け具体的な数値目標を設定して取り組んだ。

Ⅲ 成果と課題

1 成果

課題の把握・共有、組織的かつ計画的取組が効果的であった。特に「一点突破方式」による課題の焦点化や指導体制の組織化が効果があった。

2 課題

成果が実感できなければ、どんなに素晴らしい指導をしても継続することができない。目標を数値化し、振り返る場面を意図的に設定することが大切である。

【研究協議】

質問（青森県）

「今回の共同研究に参加した学校規模と生徒数を教えていただきたい。」

回答（青森県 俣田）

「大きい学校で600人規模、小さい学校で10人程度の学校規模である。そのため、特定の共通課題に一斉に取り組むのではなく、学校の課題を明確にして、それぞれの学校が課題解決に取り組む方式をとった。」

〔発表1〕

「つなぐ道德」の実践を通じた道德教育の推進

福島県田村郡小野町立小野中学校
富岡 泰成

Ⅰ はじめに

田村支会では「つなぐ」をキーワードに掲げ、校長間で情報を共有することを通して、田村地区全体で教員の育成に取り組みたいと考え、道德教育の充実を図ることを目指して、研究を推進することとした。



Ⅱ 研究の概要

1 研究のねらいと方法

以下の校内（視点1）と校外（視点2）を研究のねらいとし、研究を進めていくこととする。

＜視点1＞教員の協働的な校内体制の構築

＜視点2＞地域連携による学校マネジメントの充実

I期、II期、III期と区切り、研究を推進する。

Ⅲ 研究の実践

1 I期の実践（令和3年7月～令和4年3月）

(1)＜視点1＞における実践

学級担任、学年主任、学年副担任の学年スタッフ全員が、ある一定の期間ローテーションで授業を行う「ローテーション道德」を学年ごとに実施した実践（A中学校）

2 II期の実践（令和4年4月～令和4年10月）

(1)＜視点1＞における実践

①【実践1】教科（美術科）の特質を加味した校長・学級担任の協働的な実践（B中学校）

②【実践2】学年教師団の相互研鑽をもとにした対話的な授業の実践（C中学校）

(2)＜視点2＞における実践

①【実践1】学年ローテーションから学校ローテーションへの展開（D中学校）

②【実践2】小・中学校保健委員会との関連から思考を深めた実践（E中学校）

3 III期の実践（令和4年10月～令和5年6月）

(1)＜視点1＞における実践

①【実践1】教科(美術科)の特質を加味した校長・学級担任の協働的な実践（B中学校継続）

②【実践2】学年教師団の相互研鑽をもとにした対話的な授業の実践（C中学校継続）

(2)＜視点2＞における実践

①【実践1】学校運営協議会の機能を生かした地域と連携した実践（F中学校）

②【実践2】生徒の進路意識の向上に向けた道德実践（G中学校）

Ⅳ 成果と課題

1 I期の成果と課題

全校道德の実践を各学校で行い、「聴き合う道德」の展開等の成果が見られた。課題としては、評価の在り方、学校運営協議会とのつながりの強化が挙げられた。

2 II期の成果と課題

田村支会9校の中で「つなぐ」をキーワードに人と人、学校と学校の外部を校長がつなぐ体制づくりと教員の意識改革が確実に実現した。

3 III期の成果と課題

生徒との信頼関係の深化が期待できる学級担任のコメント、アクティブラーナーとしての教員集団への変容、地域との関連を図った新たなアイデアが生まれた。

【研究協議】

小野寺先生（山形県）他

「ローテーション道德」の評価をどのように行っているのか、また課題があれば教えてほしい。

発表者 富岡先生

学級担任以外が授業を行う場合でも担任が授業に入って評価するため、担任の負担感が多くなる。

〔発表2〕

自らの生き方を主体的に探究する力を高める
道徳教育の推進

宮城県気仙沼市立鹿折中学校 亀谷 寿之

I はじめに

震災後、学校教育は地域の復興や未来創造の担い手としての生徒の育成に力を注いできた。防災教育や志教育を中心とした担い手づくりに一定の成果は得られたものの、学力や不登校生徒の増加、自己有用感の育成等は、今なお課題となっている。



Ⅱ 研究の概要

- 1 当地区の道徳教育に関する意識と新学習指導要領への取組状況を把握し、課題を明確にする。
- 2 課題解決に向けた取組を提案し合い、各校での実践につなげる。
- 3 本主題に係る校長の役割と指導の在り方を探る。

Ⅲ 研究の方法

令和3～5年度の3年計画で行う。

Ⅳ 研究の実践

1 実態調査の実施

(1)実施方法（R3年10月実施）

新学習指導要領に基づく道徳教育の実践状況について実態を調査した。

調査の対象は地区内13校の校長と、勤続4年経過以上の教員の内、現在も学級担任を務めている教員とした。

(2)調査結果〈校長用〉

- ①道徳科の指導体制に関すること
- ②研修に関すること
- ③指導に関すること
- ④校長のリーダーシップに関すること
- ⑤課題について

(3)調査結果〈教員用〉

- ①授業スタイルの変化

②生徒の変化

③指導上の悩み

④生徒に育てたい道徳性

⑤課題について

(4)調査結果を受けての課題設定

①研修の充実

②道徳科の教材研究への時間確保

③道徳教育推進教師の機能活性化

④教育活動全体を通じて行う道徳教育の推進

2 令和4年度における課題への取組（改善状況の調査から）

(1)研修の充実

(2)道徳科の教材研究への時間確保

(3)道徳教育推進教師の機能活性化

(4)教育活動全体を通じて行う道徳教育の推進

3 令和4年度取組の考察

(1)校内での人材育成

(2)時間の創出

(3)職員の共通理解

V 成果と課題

1 成果

課題改善のための具体的な取組を共有することができた。またそこから、道徳教育を更に推進していくための校長の関わりとしての「人材育成」、「時間の創出」、「職員の共通理解」の視点を得られた。

2 課題

校長として人材育成、時間、共通理解の視点を基に今年度の道徳教育への取組を充実させ、生き方を主体的に探究する力の一層の育成に取り組んでいきたい。

【研究協議】

中潟先生（福島県）

「業務改善と授業改善は一体」について具体的な取組を教えてほしい。

発表者 亀谷先生

月1回、道徳の授業日前を5校時にし、放課後に道徳の教材研究の時間を確保するようにしている。

[発表1]

主体的・対話的で深い学びの実現

～ICT活用を核とした生徒の資質・

能力の育成を図るための学びの改善～

岩手県一戸町立一戸中学校 佐々木由貴子

I はじめに

GIGAスクール構想により、ICTを効果的に活用することが求められるとともに、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図るため、研究を行ってきた。今回は、一戸中学校の3年間の歩みを発表する。

II 研究の概要

令和2年度から「い
わて学びの改革研究事
業」の研究協力校とし
て、一戸小学校と連携
を図り効果的なICT
の活用について研究を
行ってきた。

研究主題を「学び合
いの中で自分の考えを表現できる生徒の育
成」とし、学校教育目標との関連、生徒の実
態把握、各種学力調査やアンケートの結果を
踏まえて表現力を高めていきたいと考えた。
また、ICTを活用した学び合いを全教科で
取り組んだ。



III 研究の方法

研究の方法は資料を参照。今回は、令和4
年度の具体的な研究実践を中心に発表する。

IV 研究の実践

1 学校全体で目的を共有して取り組む

岩手県の取り組みである、「確かな学力育
成プラン」に基づき、「自分の考えを表現で
きる力」と「自ら課題に粘り強く取り組む力」
の2つを目指す資質・能力とし、教育活動全
体で取り組んだ。

互見授業を推進し、「目指す資質・能力」
と「ICTの活用場面と方法」の2つの視点
で授業参観と校内研究会を実施し、さらなる
資質・能力の育成に向けて何ができるかを学
年や教科を越えて考え、明日からの実践に見
通しを持つ機会とした。

ICTは、資質・能力を育成するための
ツールとして、令和2年度はまずは使って
みることからはじめ、令和4年度には、全教科
で学び合いのためのツールとして使えるよう
になった。

2 組織で取り組む ～校長としての関わり～

ICTの活用には、教職員に温度差があ
り、スキルや考え方にも開きがあった。令和
4年度は、「ICTを活用できる仕事の配置」
や「使わざるを得ない場面の設定」「授業研
究や授業検討を通したコミュニケーション場
面の設定」などを通して役割分担を明確にす
るとともに、今までの当たり前を底上げする
ことに校長として支援した。

また、研究推進の活性化のために、小学校
や近隣高等学校との連携や研究機関、行政機
関との連携・支援も行った。

さらに、校長提案により「いちのへプロ
ジェクトチーム」を年度末までの期間限定で
立ち上げた。「教育課程・学校評価」「働き方
改革・部活動地域移行」「学力向上・情報活
用」「特別支援学級の開設」の4グループで
構成し、課題解決に向けて話し合いを行った。

3 教育活動全体で取り組む

実践を通して「考えを深めさせたい」「表

現に根拠を持たせたい」などの新たな課題が生まれてきた。これまでの授業実践にICTを加えることで、効果的に資質・能力の育成を図ることができるのではないかと考え、実践を進めた。

家庭での活用については、学習支援アプリを使った学習やレポートの作成、調べ学習などを行っている。自ら学習を調整する力を身につける上でも、家庭での有効活用は大切になってくる。

V 成果と課題

1 成果

生徒の学びでは、ICT活用について学年が上がるにつれて生徒の意識が高まっていること、生徒のICT活用スキルが向上していることが挙げられる。

教職員の学びでは、校種を超えてICT活用研修の連携ができたこと、生徒の力を伸ばしたいと思いながら実践することで、生徒たちの表現活動も前向きになったこと、学校公開研究会に向けてICTを活用した授業づくりを進めたことで授業改善への意識の変容が見られたこと、プロジェクトチームによる課題解決に向けた話し合いを通して、見通しを持つことができたことが挙げられる。

2 課題

生徒の学びでは、「粘り強く取り組む力の育成」や「学んだことを生かし自分の考えをまとめること」について、成果が表れるまでICTを活用した実践を継続する必要があること、課題解決のための1つのツールとして、活用場面を選択できる学習活動を指導計画に位置づける必要があることが挙げられる。

教職員の学びでは、表現活動や振り返りの位置づけを図ること、学習保障や生徒指導面

から、朝活動の円滑化のための勤務時間の変更や、アプリの活用方法の精査など改善を進めていくので、効果を検証したい。

【研究協議】

奥山先生（山形県）

勤務時間の変更について、具体的に教えてほしい。

発表者 佐々木先生

本校は、職員の勤

務時間を5分後ろに下げた。朝の打ち合わせを短くし、8時15分からだったのを8時20分にした。職員打ち合わせは、共有フォルダに細かい連絡などを入れて、出勤したらそこを確認するようにした。

前田先生（青森県）

小中連携を具体的にどうしているのか。

発表者 佐々木先生

それぞれの校内研究会を参観し合って、他校種のICTの活用状況を知ることや、教科に応じた活用の方法や視点について持ち帰って研究に役立てた。

小野寺先生（岩手県）

今までの当たり前を底上げすることに、校長として支援したとあるが、具体例などを教えてほしい。

発表者 佐々木先生

今までの当たり前は、過去の一戸中学校の当たり前。例を挙げると、授業研究会のときは、同教科の教員がいないため、授業者のみが悩んでいたが、生徒を知っている学年で研究の視点で考えていくことを当たり前にした。何かあるときは学年で動く、組織でやっていく意識を育む意図で行った。



[発表2]

確かな学力の育成を図る学校経営のあり方
～今日的課題の解決に向けた

共通実践を通して～

山形県飯豊町立飯豊中学校 金田 孝善

Ⅰ はじめに

予測困難な時代だからこそ「主体的・対話的で深い学び」の実現が重要になってくる。

6つの中学校からなる西置賜地区の校長会では、「生徒の意識・姿」「指導者の意識」に焦点を当て、実態をもとに検証し、主題に迫ることこそが「確かな学力」の育成を図る学校経営につながっていくものと考えている。

Ⅱ 研究のねらい

- 1 求める生徒の実態調査と求める力をつける指導をしているかの教師の姿の調査を実施し、課題の把握と改善の方向性を探る。
- 2 教員の担任力向上に向けた研修の充実を図るための、校長の役割を探る。

担任力は、山形県教育委員会で提唱しており、学習指導力、生徒指導力、特別支援教育力、ICT活用・情報モラルの4つを統合し、授業を核とした学級、学年、教科経営を行っていく力のこと。

Ⅲ 研究の概要

研究の視点は、授業力向上を目指した「評価の3観点」による確かな見取りと学習評価の工夫、「主体的・対話的で深い学び」の実現のためのICT活用と振り返りの場面設定、「学びに向かう力」の育成のための自己理解・人間関係（絆）づくりとした。

Ⅳ 実践の概要

1 アンケートの実施と研修

アンケートは、全国学力・学習状況調査の生徒質問紙の中から、自己理解、関係づくりなどに関する9項目と、授業、



学ぶ意義などの7項目、計16項目を選び出して構成した。アンケートは6月と12月に6校の全生徒、全教員に行った。

アンケートにもとづいた実践としては、飯豊中学校で、生徒のアンケートと、全国学力・学習状況調査の生徒質問紙や西置賜地区アンケートの結果平均を比較し、ポイントが上回った項目を洗い出し、その理由を教員が考え合うワークショップを行った。

2 授業力向上を目指した「評価3観点」による確かな見取りと学習評価の工夫

白鷹中学校では、指導案の指導観に3観点の評価規準を書くことで、目指す生徒の具体的な姿をイメージして授業に臨めるようになった。また、単元を通して、指導に生かす評価と、記録に残す評価を指導案に明示したことで、何をもとに、どのように、どの場面で評価するかが明確になり、達成状況の把握や授業改善に生かすことができた。

3 「主体的・対話的で深い学び」の実現のためのICT活用と振り返りの場面の設定

小国中学校は、教員のICT活用指導力の向上を重点に据え、ICT活用研修会の実施とOJTの推進を図った。

叶水中学校では、小中併設の小規模校で、集団での対話が難しい環境にある。それをICTの活用により補い、対話的な学びを充実させるため、「バーチャル転校生」という

実践を行った。教師があらかじめバーチャル転校生に台詞を仕込んでおき、授業の時に生徒の反応に応じて話させることで、違う意見に触れ、考えを深めることにつながった。

振り返りの場面設定について、長井北中学校の実践では、各教科共通した授業づくりデザインを作成し、その中で自己変容を認識するような振り返りを重視した。白鷹中学校では、振り返りを、学びを実感し次の学びにつなげる場と位置づけている。

4 「学びに向かう力」の育成のための積極的な自己理解・人間関係（絆）づくり

長井北中学校では、キャリア教育を推進し、1年生時は先輩から学び、2年生で市内の2つの高校を全生徒が訪問する、3年生で上級学校訪問と職場体験を実施するなど、進路や将来について考えさせることで生徒に学びに向かう力を育てている。

小国中学校では、生徒理解と良好な人間関係づくりに力を入れている。サポートグループ会議を行い、クラス内で孤立気味の生徒を周りの生徒がチームを作って声をかけたり、気遣ったりする取組を行っている。また、内緒でクラスメイトをサポートする、シークレットサポーターなどを行い、温かな集団づくりに努めている。

長井南中学校では、学びに向かう力を育成するために、疑問が生まれる課題を設定したり、ゆさぶりや切り返しの発問をしたりしている。

V 成果と課題

成果については、全6校で全ての生徒、教師にアンケートを実施したことで、地区の実態を共通で把握することができたこと、教師がアンケートに答えることで、何を大切に

て指導に当たるか、授業を構想する際に留意することは何かを意識するきっかけとなったこと、アンケートの結果をもとに自分の学校の特徴や課題を洗い出し、結果について話し合うことで、授業改善について教師が考えを共有することができたことが挙げられる。

校長の役割として、「主体的・対話的で深い学び」を目指し、日常の授業改善が図られるよう、校長が授業参観を通して、研究主任や教科主任に指導助言をしたり、よりOJTが進むための仕組みや雰囲気を作ったりしていく必要があると考える。

【研究協議】

羽柴先生（岩手県）

サポートグループ会議の効果、実施に当たって配慮した点は何か。

発表者 金田先生

グループに入れる生徒を担当だけでなく複数の先生で考えた。効果は、グループでのサポートにより孤立気味の状況が改善されたことが多かった。サポートする側の生徒の意識が大きく変わったのも効果であった。



小野寺先生（岩手県）

求める教師の姿について、どのような調査をしているか。進捗状況はどうなっているか。

発表者 金田先生

先生方にアンケートをとり調査を行った。その際、校長より職員会議等で意義を説明した。昨年度は6月と12月にアンケートをとったが、大きな変化はなかった。今年度もアンケートをとり、昨年度の比較していく。

記 念 講 演

演 題

「不透明かつ分断の時代における校長のリーダーシップを考える」

～東日本大震災・コロナ禍の先へと向かう東北教育界のリーダーたちへのエール～



講師 PwCコンサルティング合同会社マネージャー

高 橋 洋 平 氏



記念講演

「不透明かつ分断の時代における
校長のリーダーシップを考える
～東日本大震災・コロナ禍の先へと向かう
東北教育界リーダーへのエール～」

PwCコンサルティング合同会社 マネージャー

高橋 洋平氏

先生方おはようございます。只今早崎先生より身に余るご紹介をいただきました、高橋洋平です。

今日は久々に、福島会津に入らせていただきました。本当に嬉しく思っております。少しタイトルは長いものになっていますが、先生方にメッセージやエールを伝えられるようなお話をしたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

私の出身は宮城県登米市というところで、私も東北人になります。父は中学校の保健体育の教員であり、大変厳格な父のもとで育ちました。父は登米市の前教育長を務め、私もこの度鎌倉市の教育長という職を仰せつかり、身に余る仕事であります。この講演を依頼された後に決まりまして、8月から教育長という仕事をしっかりやらせていただきたいと思っています。

福島県では3年間教育総務課長をやりまして、その後企画調整課長ということで復興の仕事をしていました。その後文科省に戻りGIGAスクール構想の仕事などをして、そして今PwCコンサルティングというコンサルティングファームという会社に移り、教育チームというのを立ち上げ、先生方の働き方改革であったり、学校のデジタル化であったり、また大学の色々な戦略を考えたり、そういう仕事をしています。

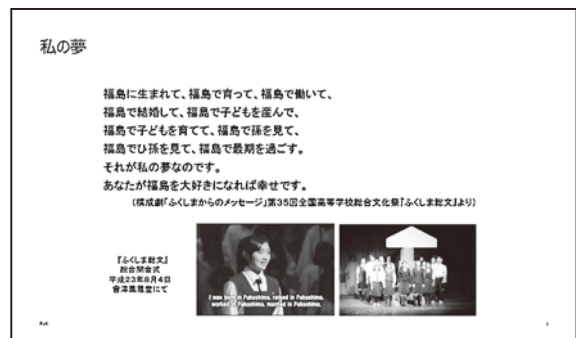
今日の予定でございますが、大きくは4つお話しできればと思います。まずは原発事故、復興というところを、それから学校の働き方改革、そしてGIGA、生成AIというChat-GPT、そして最後は先生方へのメッセージという形で進めていければと思っています。

本日のメッセージの一つは「探究する学校」のリーダーであれ！ちょっと偉そうですけれども、探究する学校というところを、今日の一つ筋の通ったテーマとして、設定して

お話しできるかなと思います。まあ当たり前じゃないかと思うかもしれませんが、探究というのはなかなか深い言葉でありまして、これから子どもたちが、変化が激しい世界で生きていくという中で、この探究する力って本当に大事な力ではないかなと改めて思うところなんです。

1. 原発事故と復興を通じて考える「探究」とは？

さて、まずは原発事故と復興を通じて考える「探究」ということで、お話しできればと思います。まさにここ会津から、高文祭（ふくしま総文）ということで、震災原発事故直後本当にできるのかという状況から、この印象的なフレーズが紡ぎ出され、福島の復興の歩みが始まったということだと思います。



そしてこれは私が大好きな福島県教育庁社会教育課の事業で、福島の17字ということで、5・7・5ですけれども、親と子とか、友達同士とかペアで詠み合うものです。これで10年分を振り返ってみると、復興の歩みが分かるかなと思います。

「塩むすび にぎり続けた 手が赤い」(子)
「被災地で 心にしみる 塩むすび」(父)
炊き出しのような段階から、だんだん月日が経っていった、避難指示が解除され、町に戻れるようになって、5年ぶりに戻ったら、「五年ぶり 名前呼ばれて てれ笑い」(子)

「ふる里の 見覚えある顔 ほっとする」(母)
復興の歩みが徐々に分かってくるわけです。

「仮設跡 父と練習 再開へ」(子)

「公園の 仮設跡から 笑い声」(母)

仮設住宅がだんだん無くなって、街に戻っていき、そこが空き地になって、いつもしていた練習の風景が、本当に鮮やか思い浮かびます。また、Jビレッジ、ここは原発事故後の基地になったわけです。そこがまた復帰して、そして子どもたちが駆け回る、そういう風な風景が戻ってきたなというのが、本当にありありと、この17字から考えられます。こういうのを読むだけで、私は涙ぐんでしまいます。

私も福島県にいたので、復興とは一体何なんだろうなとずっと考えてきて、まさに探究してきました。正直未だにその答えは見つかりません。一体何が復興なんだろう。県の教育委員会を離れ、行政のど真ん中企画調整部にいる中で、復興途中では何%人が戻ったとか、道路が何%復旧したとか、そういう指標で判断することは可能ではあるんですが、果たしてそれが復興なんだろうかというところ、まあちょっとうーんってところです。

私のある意味卒業論文みたいなものですが、知事メッセージを10年目で出しました。知事の傍付きの課長をやっていたので、これだけは私に書かせてほしいと言って自分で書いたんです。そこで復興とは何かというのを少し定義付けて、先ほど17字にあったように、「また海で遊べたら」とか、「うちの畑で野菜が採れたら」とか、「また家族と一緒に暮らしたら」とか、「ふるさとで友と会えたら」とか、本当に様々な復興の形があり一個ではない。それを、お年寄りから子どもたちまで色々な復興の形があり、お互いがお互いを支え合い、未来に向けて自ら歩みを進め、喜びや幸せをかみしめていくことこそ、私たちが目指したい復興。こういう形で復興とは何かと、私なりの一つの答えを出してみたいんです。やはり多様で、幸福や自由というものを、いかに獲得していったかというプロセスそのものだ。傷つきながらも自分の足で立ち上がり、色々な人と協働しながら前に進もうとする、それこそが復興なのかなと思っています。それって教育の目的、目標みたいなところと通ずるところがあり、これは指導要領前文です。こういうところと復興は軌を一にするものがあるなと思っています。

復興教育から見たものということで、少し県外の先生方にもご紹介しようと思いま

す。ご覧のとおり原発事故があり、12市町村の子どもたちは学校ごと避難しました。私が福島に来た時は、この避難指示が解除され、徐々に学校が戻るという段階、フェーズでした。私は学校再開支援チームで市町村が地元に戻り学校を再開させる取り組みの支援をしていました。飯舘村の子どもたちは福島市や川俣町に避難し、約8年間プレハブで過ごしました。飯舘村も素晴らしい校舎ができて、カリキュラムを組み、さあ戻れるぞということになり、プレハブ校舎を閉める状況になったんです。教育委員会の人たちや、先生方と改めて喜び合い復興の歩みを感じていたところ、ある小学校6年生に言われたんです。「ここは仮設なんかじゃない」と。「仮設、仮設と言わないで」と。それは6年間、仮設に通ったからこそその発言だなと思うんです。人生に過去の時間は無い。1秒を、子どもたちは今を生きているんだと思いました。過去の、10年前の福島の姿を見て、未来のことを考えていたつもりでしたが、今の子どもたちの感情や見取りが私自身できていなかったと感じました。

ここは仮設なんかじゃないといった小学校6年生

子どもたちは今を生きている（飯舘村仮設小学校）



あらためて考えてみると、原発事故とコロナはすごく共通する部分があるなと思うんです。これも知事メッセージからの引用ですが、震災後10年、ようやくというかやっとという、そういったタイミングで、新型コロナウイルスの猛威、災いの中にあります。福島だけでなく、世界全体が苦しみの中にあります。そして知事のメッセージでは、子どもたちの声を差し込み、そこに知事の言葉を載せていく作りにしました。引用させてもらった平子さんのスピーチに分断というキーワードが出てきたんです。私は原発事故の、そしてコロナの被害の本質は分断だと思っています。原発事故で避難指示だとか、放射線、賠償金、放射性廃棄物、今は処理水、それぞれが色々な分断を生んだと思っています。避難する、しない。賠償金が道路を挟んで出

る、出ない。廃棄物を一体どこに持っていくのか。または処理水です。

コロナの暴走でマスクもワクチンも自粛もGo Toも色々な線引きがあって、ここからここはやっていい、やってだめ、じゃあその線の上にいる人は一体何なんだろうとか、様々な分断が生まれたなと思っています。そう考えると、あらゆる社会問題の本質の一つが分断なのかなと。不透明な変化の激しい時代を子どもたちは生きていく、そういう子どもたちに必要な学びとは何なんだろう。その未来から今の教育を我々は考える必要があると思います。分断を乗り越えるために探究するという事なのかなと思います。

これから映像を少しだけ流します。ふたば未来学園の演劇教育の話をしたいと思います。

(映像視聴)

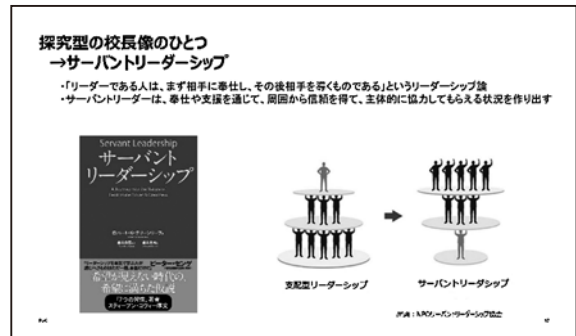
出典：東洋経済education × ICT/探究
TV 23/06/02

公開：「演劇教育からつながる探究へのまなざし」

私が体験した時は子どもたちが2人取っ組み合いしている場面で、「何でお前東電なんかで働いてんだよ」と詰め寄るシーンでした。実際は詰め寄っている子の親御さんが東電で働いていらっしゃる。様々な分断はあるけど、その向こう側に立って考えてみる。それで解決できない問題もあるけれども、向こう側の視点に立ってみると共感が生まれたり、何か変化があったり、リフレクションがあったりする。それをどんどん掘り下げて考えていく場面です。色々な教育をしていますが、その中でも一つ印象的な学びかと思っています。

分断の時代に求められる学校経営という視点に立ってみると、学校が組織として探究できているかと私たちは問われています。子どもの学びと教職員の学びは「相似形」です。これは中教審の教師の在り方特別部会でも相似形があげられています。子どもたちに探究的な学びを求めるのであれば、我々自身が探究的にならなくてはならない。先生自身が探究的な学びをしなくてはならない。今日は一方通行な講義形式ではありますが、本来はここも探究的な学びが生まれるような場になっていないといけないということです。相似形がいくらかでも繋がっていくということです。子どもが探究的に学ぶには、先生がそうでないといけないし、先生がそうでなければなら

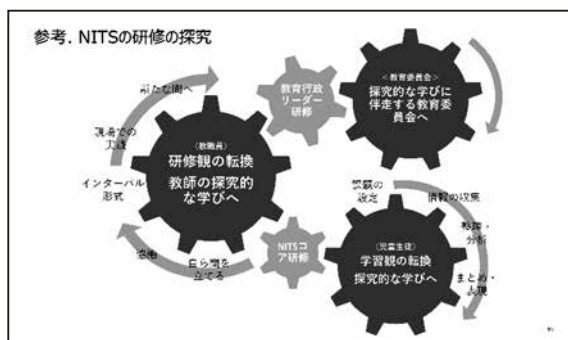
ないから校長もできるようになってないといけないし、校長に探究的な学びをしてもらうから教育委員会教育長自身が探究的にやらなければならない。なので、先生方が仕事や授業を改善し続ける、それを校長先生が支える、いわば探究する学校へ転換するリーダーシップが求められると思います。



探究という言葉から感じるもののキーワードとしては、わくわくとか、本質を問い直すとか、子ども目線で一旦考えてみるとか、伴走する、挑戦するそして良質な対話をする、そういったところが大事になるのかなと思います。探究型の校長像のひとつが、サーバントリーダーシップというリーダーシップかなと思います。これはリーダーシップの一つにすぎませんが、サーバーつまり奉仕者みたいなので、まず相手に奉仕して、その後相手を導くという、このグリーンリーフさんという人が提唱しているものです。こういうピラミッド型の支配型のリーダーシップ、教育行政は重層構造だと言われていますが、文科省、県、市の教育委員会、市町村の教育委員会、学校があり校長がいて、教職員がいて、子どもたちがいるというようなピラミッドではなく、逆ピラミッドではないのかということです。子どもたちを中心に置いてそれを支える、励ます、助ける、そういったリーダーシップを先生方が持たないといけない。だとするならばその先生方を支えるリーダーシップを校長が持たなくてはならない、その校長を支えるリーダーシップを教育委員会が持っていないといけない、ということだと思います。

何かやろうと主体者が思う、学習者が思うところを支えるというリーダーシップの仕方だと思います。企業でも、今私がいる会社でも全く同じ構造で、この逆三角形を徹底している感じです。私の上司も、社長であるパートナーである人たちも、私が好きにやるということを支えてくれるという立場でいてくれています。これが学校でも大事だし、

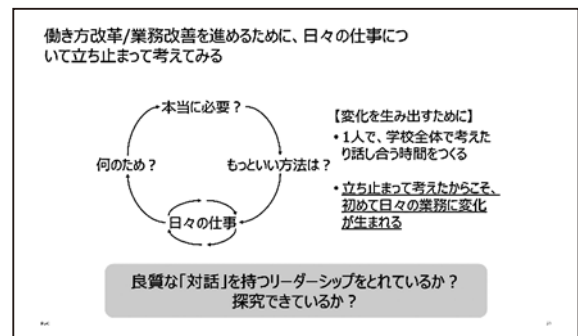
馴染むのではないかと思います。今、NITSさんと一緒に仕事させていただいて、NITSも研修観の転換にチャレンジしています。研修というと大学の先生が来て一方的に話すだけ、与えられたメニューでつまらないというのが、正直先生方が思っているところだと思います。それをこういう構造にしていこうとしていまして、子どもたちの学びを探究的な学びにする、課題を設定して、まとめて、表現していくという思考サイクル、学びのサイクルを回していくのであれば、先生方の研修自体もそうならないと嘘ですよ。なので自分たちが問いであったり、課題であったり、やりたいこと、プロジェクトを持ち寄って、それを年間通じてオンラインも含め伴走しながら学んでいく研修スタイルに変えようとチャレンジしています。それを我々コンサルティングファームということで応援させていただき、NITSコア研修、管理職研修、中堅研修を伴走型の研修に改めていこうとしています。さらに来月には、完全に新しい試みですが、教育行政リーダー研修、これは教育長や教育行政リーダーたちの研修で、これを全く同じ構成にしようとしています。探究的で伴奏的な教育委員会にしていこうためには、その研修自体がそうでなければならないということで、教育長さん方に課題を持ってきてもらう、そしてそれを深めていくような研修スタイルにしよう、私もここで講師として参画する予定になっています。ですからNITSのチャレンジが、相似形だということを表していると思います。



2. 学校の働き方改革を通じて考える「探究」とは？

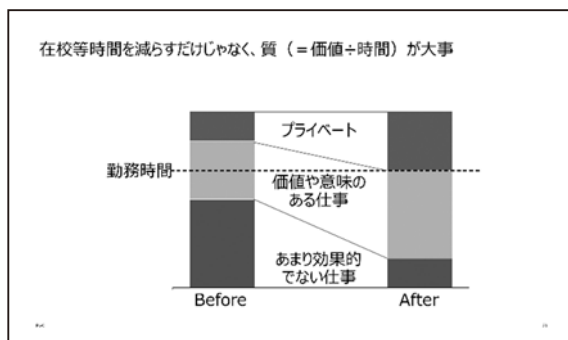
探究的な学びというのは相似形、それをどこまでも繋げていく、社会まで繋げていく必要があると思います。学校に転じてみると、今校長先生方が苦しんでいる部分は働き方改革なのかなと思います。PwCという会社でも、学校の働き方改革の支援をしており

ます。それはコンサルティングファームらしからぬやり方で、非常に泥臭く、現場に入り伴走型の支援をしています。上からの働き方改革、何分早く帰ろうとかではなく、先生方がやりたいプロジェクト型の働き方改革をする。先生方自身が探究していくのに伴走する、という働き方改革ですので、先生方に推進チームになっていただき、楽しくワイワイ議論しながらああしてこうしていこうということを考えています。切る議論ばかりではなくて、先生方がやりたい、授業をさらに研究したいというそのための時間を取りたいというのと、ではどういったところで余白を生むんだって、大胆に変えるんだって、というところをセットで議論していくので、納得感も高まります。個別の学校に伴奏しているということで、我々はプロトタイプとしてやっているのですが、今回文科省で事業化してもらい、今全国21校の働き方改革伴走支援をしています。この成果は今年度末には出てきますので、ご注目いただければと思います。私、鎌倉市の教育長になっても、引き続き携わる予定になっています。



そこで感じることは、これはピーター・センゲという経営学の先生が言っていることですが、シングルループ、ダブルループです。先生方、校長先生も含めて本当に忙しい。個々の日々の仕事に追われ、保護者からこういう連絡があった、子どもは今日こういうことをした、それに対応していく。そうするといつまで経っても楽にならない。ずっとグルグル回ってるような感じで、そこで一旦立ち止まって考えられるかというのは結構大きなことで、ここで良質な対話をととは言いますが、良質な対話を持てるかということだと思えます。その日々やってる仕事が一体何のためにやっているのか、本当に必要なのか、もっといい方法はないのか、と考える時間があるとむしろ楽になる。先生方は、働き方改革する時間もない。それもよく分かります

が、時間が取れないと苦しいままです。ではただ話せばいいかというと、それは対話ではない。単なる議論で終わってしまう。A先生、B先生がいて、そこが対立して何も決まらない。良質な対話を校長が用意できるかが大事。そしてさらに先生方がそういったプロセスに慣れているか、探究できるかということが問われていることだと思います。大まかに言うと、短く太くすることだと思います。ですから子どもと向き合う時間を確保するためと前は言っていましたが、それだとやり甲斐感がないと私は思っていて、やはり価値のある仕事を増やす、そしてプライベートの時間を増やす、そして意味のないものというか効果的でない仕事を減らすという考え方で勤務時間に収めることなのかなと。短くとか価値がある時間を増やしていくことかなと。



私も学校に入らせてもらい非常に思うのは、学校は結構バイアスが強いということです。これは先生方を批判しているわけではなく、どんな社会でも我々の会社でもあります。が、何々するべきとか、何々してはいけないとか、普通こうだよとか、やっぱりこうだよとか、どうせできないという声が、やはり最初はあがってきます。でもそれって本当なのかと見ていく必要があると思います。例えば毎日掃除はするべきだとか、下校指導は職員全員で指導するべきだとか、職員会議のあり方も職員全員で話し合って決めるべきだとか、年休とかも、みんなが年休取れないのは仕事量が多すぎるからだとか。本当なのかな。通知書の所見とか定期テストとか全部そうですけれども、自学ノートとかにコメントを書かなければならないとか、でもそれが本当に必要なのかと考えてみるとそうじゃない場合もあります。だから問い直すってことが私は大事だと思っていて、変革とか改革という言葉は文科省でだいぶ使ってきたのですが、私はあまり好きではなくて、問い直すことが大事だと思っていて、問い直した結果

同じことをやるかもしれないです。でも、やはり問い直してみると、同じことをやったとしても輝いて見える訳です。何のためにそれやっていたか、やはり先生方が腹落ちするからなんですよね。

リーダーに必要な探究的思考法①

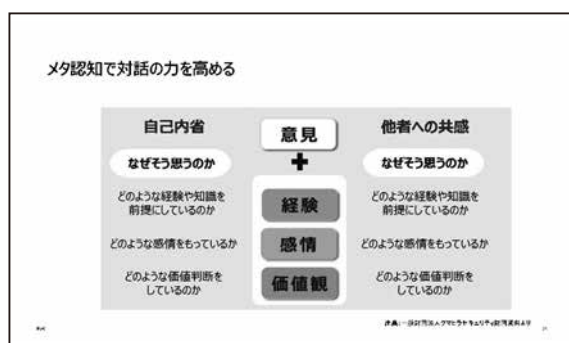
思考・行動の癖に
自覚的になり
天才を超える思考法

クリティカルシンキング

コンサルみたいなことを少しだけ、今日は二つほど先生方に具体的な武器をお知らせしたいと思っています。先ほど平田オリザ先生が触れていたクリティカルシンキングについてです。天才を超える思考法と言っています。ロジカルシンキング、つまりいかに分かりやすく伝えるかといことは、これからどんどんAIにとって代わっていくものだと思います。それをどう深く探究できるかという力、批評的に疑って見えるかという力、これは次の指導要領に必ず入ってくる概念だと思っています。一言で言うならば、なぜというのを問い直すということ、それだけです。それって本当なのかとか、いつからそうになっていたんだとか、何でそう思っているんだとか、そういう問いを先生方に投げかけてもらいたいなと思うんです。なので研究授業資料にしる、宿題にしる、何でも同じです。そもそも何のために。目的ですよ。目的と手段。そもそも何のためにやっているのかという話で、研究授業は何のためにと考えてみた時、教育目標の先生方の共通理解だというのであれば、別にそんな凝った資料ではなくて1枚の紙でいいかもしれない。宿題は何のためにと言うのであれば、自律的に学ぶ子を育てたいというのであれば、それならば宿題を毎日同じやり方で出すというやり方にしなくてもいいかもしれない。文化祭は何のためにと言うのであれば、日頃の学びを発表する場であれば、そんなに華やかな衣装なんかはいらないかもしれない。給食だってスムーズさと言うのであれば、まあ分担して子どもを見ればいいのかも。宿題を毎日出すという手段があったとして、それを何のためにやっているのかと何回も何回も問う、これはクリティ

カルシンキングです。より上位の目的、目標に結び付いて、主体的・自立的に行動する子どもが育つたということだったら、主体的・自立的に行動する子どもを育てるために宿題が必要なのかともう1回問い直してみる。そうすると別に宿題ではない手段でもむしろいいのではないかという考え方に至ったりもする。クリティカルシンキング、1つの武器として発言させていただきたいと思います。

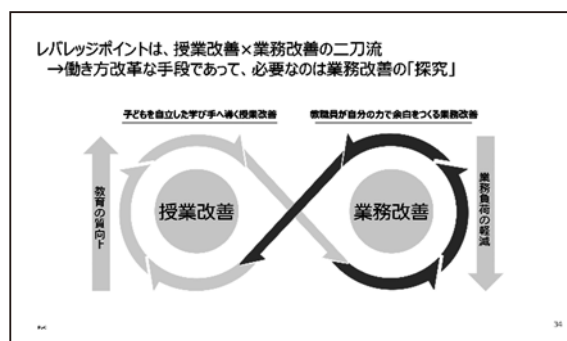
もう1つはメタ認知ということ、武器の2つ目として、リーダーに必要な探究的思考法としてお知らせしたいと思います。メタ認知、これもふたば未来学園の目標の1つに入っているのですが、俯瞰するということ、イメージとしては幽体離脱をしてみて、空から自分自身、場を見てみるというイメージで、これは熊平美香先生の認知の4点セットというものです（意見・経験・感情・価値観）。メタ認知をするということは、自分自身をメタ認知するということと、他者をメタ認知することの両方です。意見というものが、表に出てきている時点です。宿題はあるべきだ、宿題はない方がいいとか。その先生方同士の対立、その下にあるものは経験や感情や価値観です。これがあって意見というところに表出されてきてるだけなんです。なのでこの経験や感情や価値観というところに思いを満たさないと、良質な対話にならないということだと思っています。



部活動の地域移行を例にしてみると、A先生は部活動の地域移行は是非やった方がいい。その背景にある経験は過去に無理やりやらされたことがある。感情としてはそういう時にはまあ悔しいという感情。そして価値観としては、教員はやはり授業で全て発揮するべきということ。B先生にしてみると、部活動の地域移行なんてとんでもない、できるわけがない。それは全国大会に出場したという経験。すごく嬉しかったという感情。そして部活動は授業以上に子どもを育てるんだという価値観。

これがあって表出された意見だということ。この表層だけを見ていると、いつまでたっても対話にならない、分断が生まれたままということ。自分自身が部活動地移行を進めるべきと思うなら、それがなぜそういう考えが自分に至ってるのかというのを自分自身が掘り下げてみる。それは経験、感情、価値観に基づいて考えてみる。そしてB先生が部活動の地域移行なんかとんでもないと言っている背景に、一体何があるんだろうというところに思いを満たさないと噛み合わないことになります。あの先生の経験や感情や価値観というものが、どういったものなのかと試してみる。そういったことがメタ認知できると、コミュニケーションが深まり、探究型のコミュニケーションになってくると思います。

これはよく言われる氷山モデルですが、出来事というのはもうこの氷山の一角で、この後ろには外に見えないものが、今申し上げた認知の4点セットとか、メンタルモデルと言われるものはものすごく深いところにあります。その前には構造やシステムがあったりします。今の鎌倉市の教育長と全学校全教室を回ろうということで、2人で回り、色々な方と話をします。多くの課題がある中で、保護者さんから直接校長に言われてとか、本当に様々な話を聞きます。それだけだと事実だけなので、その裏に何があるのかということに思いを満たさないといけない。保護者から直接自分のところに来たというのに、いかに対応するかということだけだと、いつまでたっても同じようなことの繰り返しになる。その保護者はどういう経験や感情や価値観なんだろうか。総合的に見ないとその問題に対処することはできない。あらゆる社会でそうですが、学校は特にこの深い部分があるなと思っています。それが複雑に絡み合い、加速してどんどん難しい問題になっている。そこをどのように正確に見抜けるかというのが経営力なのかなと思います。



ここで変化のレバレッジ、なんて難しい言葉を使っていますが、ではどこに着手すれば問題の全体が解決に向かうのかという思考法が、根本原因を理解する。その目線が必要かと思えます。

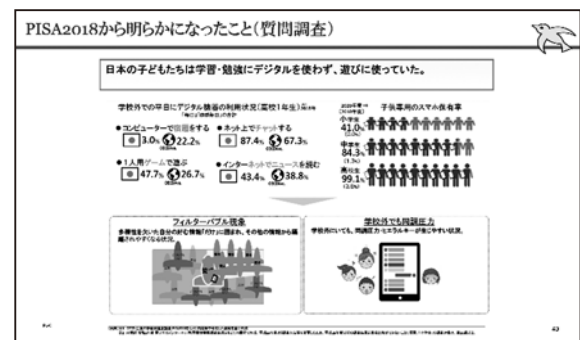
今日はここまでしか時間の関係でお話できませんが、我々働き方改革を進めている中で、少し見えてきているのはこういうことなのかと思います。早く帰ろうとか、これやめようと言っても先生方はやる気にならないし、構造的な問題に着手してないと思っています。紙をデジタル化してみようとか、やらないよりはやった方がいいのですが、そういうのは働き方改革ではないと私は思っています。やはり子どもを自立した学びに導く、子ども自身が探究者、令和の答申的に言えば、生涯にわたる自立した学習者。自立した学習者になっていくというのは我々の仕事というか願いですよ。いつまでも変化が激しくて、不透明な時代を生きていく子どもたちを育てるには、やはり自立して学び続けることを身に付けさせたいわけです。ですからそういった子どもたちに導く、授業改善していかないといけないということだと思います。授業改善と業務改善は、一体で取り組んでいかないといけない。ですから働き方改革だけを目指したプロジェクトっていうのは頓挫すると思います。先生方がやりたいというのは、やはり教育の質も良くしていく、そして探究的な学びにしていくというのが、先生方がやりたいことなので、そこを突き詰めるための余白を生み出すことが、本質的な業務改善であり働き方改革だと思っています。短く太くする。そして教育の質を上げて業務負担も軽減する。そんな夢みたいなきことができるのかということは、やはり子どもに委ねて、子ども自身が学んでいくという姿を作り出さないといけない。これがレバレッジポイントであり、本質なのかと今やりながら感じています。やりながらということで途中経過ですけど、こういったレポートが年度末に出てきますので、また先生方にお知らせできたらいいかなと思っています。

3. GIGAと生成AIを通じて考える「探究」とは？

そしてほぼ最後になってきますが、GIGAスクール構想と生成AIを通じて考えてみたいと思います。なぜGIGAスクール構想なのかというと、今の子どもたちは

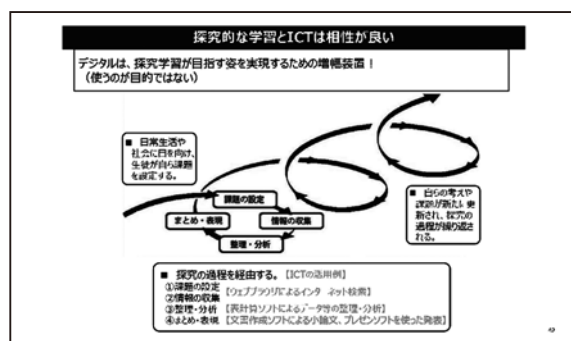
2100年を生き続ける子どもたちです。そう考えると、これだけ変化が激しい中で、2100年はどうなっているのか誰にも予想はできない。我々はもうその時にはいないかもしれないけれど、子どもたちは2100年という時代を生きるわけなので、その時代もやはり自立した学習者として生きてもらうような、そういう子どもたちを育てたいというのが我々の願いだと思います。

変化が激しく不透明な時代になっているということです。これは不透明さを可視化したものですが、東日本大震災もそうですし、コロナウイルスもそうですし、教育と労働というものもそうだったりしますけど、子どもたちが学ぶ、働くが入れ替わり立ち代わりながら、様々な仕事や遊びや幸福というものを追究していくことになると思っています。



これは文科省のPISA2018の資料です。スマートフォンを多くの中学生、高校生は持ってるという状態の中で、勉強にはICTを使わないけれども、遊びにはたくさん使っていた。そしてフィルターバブルと言われるように、SNSを通じて本当に好きな友達で、好きな情報だけを拾って、バブリングというバブルの中にいるような状態になっていく。そして分断が生まれていく。学校でもヒエラルキー、同調圧力が強まり、学校に行きたくない、行けない、座っていらないうい子どもが増えてきたかなと思います。GIGAスクールというのは、学びにICTをとということが一気に始まったわけで、私も福島から戻る時に、とりあえず1人1台配っておいながら、あとはよろしくという感じで引き継いだのですが、それで非常に先生方にご迷惑と、大変な思いをさせたと思っています。どうしてこんなことが起きたのかなというのは、これはキングドンというアメリカの政治学者ですが、政策が大きく動く時には3つの要素がびたりと合った時に動くと言っていて、それは問題、提案、政治です。逆を言えば何でこ

んなことできないのかと先生方が思う教育政策があると思うんですが、この3つが噛み合っていないから前に進まない。GIGAスクール構想はこれが合ったんです。まずコロナ禍ということで学校に通えない、全国一斉休業とかとんでもない事態になり問題が顕在化した、見える化した。そしてGIGAスクール構想、文科省の中では温めてあった1人1台構想っていうのが、今だということでデジタル庁が出ていくタイミングで出していくことができた。そして政治もデジタル庁をつくるとか、ここでやらなくてはとか、国民に説明できないというタイミングで差し込むということで、役人たちはいつもこういうタイミングを狙っているわけですが、これがはまったので、本当は段階的にやればよかったと思います。正直ただそのタイミングしかないっていうタイミングで、学校に1人1台端末をお届けできたということだと思います。



そして探究的な学習とICTというのは、やはり相性がいいと思います。これは探究の螺旋ですけども、その中でICTを活用するという考え方です。ICTを使うことが目的ではありません。

これは内閣府の資料ですけども、子どもたちが35人ないし40人がパッキングされて、色々な子がいて、不登校の子もいれば、発達障害の子もいれば、日本語で話せない子もいればという非常に難しい状態で、先生方がご苦労してて、子どもたちもなかなか座ってられない、苦しいというものを、タブレット、1人1台端末によって個別最適な協働的な学びという方に転換していきたいというのが、本来目指していたところだと思います。その中には子ども主体な学びにしていくとか、もう学年という枠組みとか、教科という枠組みとかはだんだん解けてきているような未来像があります。次の指導要領にやはりこういうセンスが入ってくると思うんです。また、標準授業時数がどうなっているとか、そう

いった議論が来年ぐらいにはどんどん始まっていくと思います。と考えるならば、結構私も鎌倉の学校回っていて、中学校とか特にそうですね、ICTが入ってより一斉授業になっていると思うんです。これは正直良くないと思うんです。1人1台、先生方も教えやすいんで、電子黒板とか、そうなるんですけど、先生方がやはりしゃべりすぎだなと思うことを自分は多く感じます。むしろやりたいことは、子どもたちが学びを自ら選び取る姿というか、個別で学んでる子もいれば、ちょっと分かりかけてたらお互い教え合ったり、先生に教えてもらう子もいて、これは小学校ですけども、個別最適な学びというのを分解してみると、そこは先生方がよくご存じだと思いますが、令和の日本型学校教育ですけども、指導の個別化というのは結構できてるかなと思うのですが、学習の個性化、子どもたちが自ら自分の特性であったりとか、何を見ると自分が分かりやすいかを考えて、自ら学びに向かいながら調整していく。なので一つの学び方ではない。そういう子どもたちに委ねていく勇氣というものが、これから問われていくのかなと思います。

これは一昨日の授業の様子です。普通の学校です。算数の個別進度学習にチャレンジし始めました。個別進度学習を本年度から始めた先生だったのですが、先生が「今日はこちらのところを目指すからね。はいどうぞ。」と言うと、子どもたちがそれぞれのやり方で学びだします。これは動画をあらかじめ先生が用意していて、フォルダに入れてあるんですけど、この動画を見ながら勉強しやすい子は先生の動画をその場で見ます。また先生のプリントもたくさん色々な種類があって、プリントをどんどん進めた方がいい子は黙々と進めて、そして分かりかけてる子は教え合っている姿があります。このクラス、寝てる子もいて、なかなか苦しいクラスだったものを、まさにこの先生の工夫で、ご自身でICTも活用しながら子どもたち自身が学びを通して育っている姿を見ました。こういう授業が本当に生まれてくるといいなと思っています。

一方子どもたちが生きるさらに未来の話をしていければと思います。生成AIの衝撃ということでChat-GPTです。すごくよく聞きます。一体あれは何なんだということだと思っています。これは先生方にご紹介した通りで、Society 5.0、一体何かと言うと、イノ

バージョンがいつどういう形で生まれてきたのかということを考えてみると、どんどんその速度が速くなっているんです。蒸気機関であったり、科学技術であったり、そういったイノベーションが今まさにAIというものを核に起こっているなどと思っています。AI・ビッグデータ、ロボティクスそしてインターネット、これを組み合わせることで凄まじい技術革新が今起こっていて、その代表例がChat-GPTだと思っていますし、こういう風に指数関数的なテクノロジーの進化になるかと思っています。

生成AI (Chat-GPT等) とは？

生成AIとは、トレーニングされたデータに基づいて高品質なテキストや画像、その他のコンテンツを生成することができるディープラーニングAIモデル

本当にざっくり言うと、

- (学習) 過去にある文章や画像等を大量に覚え込ませて、
- (プロンプト) 人間が与えた指示やルールに基づいて、
- (推論) 数学的に計算して最もあてはまる回答を予測して出力する

大まかに言うと生成AIというのは、画像とか文章とかを全部覚え込ませて、人間が指示したプロンプトという指示書通りに数学的に計算して、いい具合の答えだったり、いい具合の映像だったり、いい具合の画像だったりを作ってくれる。本当にある意味夢のようなAIなんです。

これはPwCの調査ですが、今現在は、是非とも使っていきたいというビジネスマンは23%にとどまっています、大方半分くらいの人にはまあ知らないとか、使ってもみないとか、よくわからないというのが現状です。そして文部科学省も、生成AI活用指針を作ろうとしていて、7月以降に出されると思います。私は生成AIを学校とか授業でどう使うかというのは別に本質ではないと思っているんです。夏休みの宿題に使ってはいけないとか、テストに使ってはいけないとか、それはそうだろうという話で、どう活用するかというのは本質ではなくて、我々校長先生と一緒に考えなくてはいけないのは、これで子どもたちの未来がどう変わっていくのか、そして教育はどう変わっていくのか、そして先生たちはどう変わっていくのかということだと思うんです。先生の役割がどう問われるのかというところが本質だと思うんです。では実際にChat-GPTをやってみます。(Chat-GPTの試用)

- やさしく個別最適に教えてくれる。
- しかも無料。誰かのふりをするのはとても上手。
- 文章の下書きをしてくれる、要約や翻訳も得意。

コーチ役みたいなことを、何の労力もなくやってくれます。今は汎用的なAIと呼ばれていますけど、教育用のAIがこれからどんどん生まれてきます。そうするとこういったコーチがもっと上手になっていくことだと思います。

では我々はどのようにいったらいいのかということだと思います。先生の役割や、教育界はどう変わっていくのかということだと思います。オズボーン先生の論文にあるように、47%の職業が子どもたちの成長とともに無くなると言われています。ただ私の実感としては、職業が無くなるというのではなくて、職業のうち一定のタスク、業務が無くなるということだと感じています。コンサルティング会社は多分無くなるのですが、コンサルティング会社がスライドを一生懸命作る業務は無くなる。そういうことがどんどん起きているんです。10年でこうなると言われ、10年経ちましたが、職業丸ごと消えるのではなく、職業の中で大きくこのAIに投げられる、つまり右腕というか副操縦士です。正にそういうことです。操縦士は当然人間ですし、子どもたちですし先生方。じゃあその右腕をどうするかということだと思います。

オズボーン論文から10年、どうなった？

47%の職業
→消える職業

「オズボーン、2002年に発表した論文によると、2030年には47%の職業が消失する可能性がある。これは、AIやロボットなどの技術の進歩によるものである。」

職業が無くなるというより、どの職業でもタスク・作業が無くなっていく
自分の右腕が増えた感覚に近い

これは私の考えなので不確かですが、どうなるかと予想してみると、先ほどご覧になっていたいただいた情報をまとめ、整理、表現するというこの螺旋構造を1周する、これだけではもう探究とは言えないのではないかなと思います。もうやってくれているんです。ですから得意な学び方を突き詰めていくというのが、より大事になってくるだろうと思います。指導の個別化ではなく、学習の個性化こそ大

事になってくるのではないかというのが私の仮説です。さらに学習者は学びに向かう力・人間性、この辺が大事。知識・技能や表現力は結構鍛えられる、つまり何をしたいと子どもたち自身が言えるか、思えるかというところ。そしてまだ間違いがとにかく多いので、それを分かっていないと、最後決断したり選択したりすることができない。そして正解よりも答えが無い課題や問いそのもの、ふたば未来の子どもたちが答えの無い問いに、探究的に演劇を通じて学んでいたように、そういった学びのプロセスが大事になるし、演劇は身体性やアート、喜びとか好奇心、そういったものがより重要になってくるのではないかと考えています。ですから最近、課題解決型学習というのと、探究というのは大きく違うなと思っています。結構一緒にたにされるのですが、やはりこれからは探究だと思うんです。我々コンサルティング会社がやっているのは、平田オリザ先生が言っていたロジカルシンキングに当たる部分です。でもロジカルシンキングはもうAIがやってくれるんです。では何が必要なのかというのは、クリティカルシンキングであり、探究的な学びということではないかなと思います。

4. 東北のリーダーである校長先生方へのメッセージ!

それではもうお時間になってきましたので、名残惜しいのですが、最後に先生方へのメッセージ。今日は探究というテーマで少しお話ししてみました。分断があり、変化の激しい時代、そういったところを生きている子どもたちを育てるために、我々自身が探究的にやらなくてはならないし、探究的な校長であり教育長でないといけない。それが今日のメッセージになります。探究する学校を作っていきましょうということだと思っています。これは未来を考えると、やはりそういうことになるのかなと思います。

おわりに、東北の中学校長（スクールリーダー）の先生方へのメッセージ マインドセット編

教育は未来をつくる仕事。

自らのバイアスやこれまでの理想の教育の鑑を脱ぎ、

2100年を生きる子どもたちの視点に立って、

「探究」し続ける教員集団を作らなければならない

教育とは、今日お話ししたように未来を創る仕事だと思います。子どもたちは今に寄り添いながら未来を見据えている。2100年を生きる子どもたちの視点に立つとするならば、バイアス、こうすべきだとか、しなくてはならないとか、そういったものを、またはこれが理想の教育だということをメタ認知してみ、深掘りしてみ、やはり問い直していかないといけない。そういうことができる、コミュニケーションができる教員集団というのを作っていかないといけないのではないかなと思っていますので、賛同をもし先生方さんだけいただけるならば、ぜひ一緒にしたいなと思います。

大事なものはアンラーン。1回学んだことを捨てないと新しいチャレンジはできなということを言っていて、最近アンラーン、アンラーンと流行りなんです。アンラーンの本質的な言葉の一つはこういうことかな。捨てるというか、問い直す、深める、何でなんでを繰り返すということなのです。それが子どもたちにも、我々にも求められる力なのかな、相似形なのかなと思っています。

最後になってきました。今日少し好き勝手な、あまりまとまりのない話でしたけれども、先生方と今日ご一緒できて、こういう場に立たせていただき本当に光栄です。

最後リーダーシップというところ、今日のテーマにあったので、そういった探究する学校のリーダーにということで考えるならば、こういうことかと思っています。指導要領、働き方改革、GIGAスクール、今日触れてきたもの全部です。私、文科省にいる時、本当に思ったのですが、正しすぎるというか、ある視学官の先生が言っていたのですが、今回の指導要領は正しすぎて、正しくないと言っていて、なるほど深い言葉だなと思ったんです。我々、厳しい状況であるものの、正しいことを本当に正しいことにしていくということが大事だと思います。文科省は、これは正しいと言うのが仕事ですが、それに必要なリソースであったりとか、それをいかに先生方で腹落ちさせたりしていくとか、そういったものは校長先生とか教育委員会がやらなければいけない仕事ですし、私はそこにこそ価値があると思っています。ですから文科省を一旦飛び出して、こういう仕事もしてたりはするのですが、そこで大事なものは、ロナルド・ハイフェッツというハーバード大学の教授ですが、リーダーシップの権利なんです。

おわりに、東北の中学校長（スクールリーダー）の先生方へのメッセージ
リーダーシップ編

- ・新指導要領、働き方改革、GIGAスクール構想など…
「正しいことを本当に正しいことにしていくために」
- ・ロナルド・ハイフェッツ「リーダーシップには技術の問題と適応の問題がある」
- ・リーダーの危機を回避するための「教育行政の三則」
筋を通す、論より証拠、簡潔明瞭

リーダーシップには技術の問題と適応の問題があるとハイフェッツ教授が言っていて、技術の問題と適応の問題、これを病院とかお医者さんに例えるなら、患者は苦しいのでお医者さんに薬を出してくださいとか、注射を打ってくださいとか、何とかしてくださいって言って、それを技術で医者は何とか対処しようとする。それは技術のリーダーシップです。専門性で対処する。これから大事なものはそちらではないのではないかと、ハイフェッツ教授は言っています。むしろ適応のリーダーシップ。本当にその患者を治すためには、その患者自身の生活習慣を改めてもらったり、または運動習慣を持ってもらったり、または喫煙をやめてもらったり、そういったことを患者自身にやってもらわないといけない。それを分からせないといけないというリーダーシップなんです。適応していてももらわないといけない。それが無いと、いくら薬を出しても、いくら注射をしても、物事の本質は変わっていかない。その適応させてくれるリーダーシップこそが重要だし、大変なんだということです。その辺は大いに共感するところです。そういった適応の問題をやっていこうとするならば、リーダーは危機に晒される。安倍総理やケネディ大統領といったリーダーたちは暗殺も含めて危機に晒された。そういった人たちを見るに、やはり適応のリーダーシップをさせていくことの難しさを感じます。

以前ケネディの研究をやっていたのですが、ではその危機に晒されるリーダーたちに必要なものは何なのかと考えると、文科省に教育行政の三則というものが初等中等教育局に貼ってあり、ここになります。これが先生方を守るものの一つとして良いかな思ひご紹介します。筋を通す、論より証拠、簡潔明瞭という三則です。筋を通すというのは、枝葉はいいから幹の部分だけしっかり通す。枝葉は大いに色々な人に譲るという姿勢で。

それから論より証拠ということで、教育には今日も議論したように、色々な論があるので、その中でも、やはりしっかりとした証拠を出していく。それがデータであったり、ある程度示されている学術的な知見であったりしてと思っています。そして簡潔明瞭ということで、なるべく簡潔にコンパクトに分かりやすい説明の仕方、先生方や保護者さんに対応していくというところが大事なのかなと思っています。

非常にリーダーシップというのは難しいです。今日サーバントリーダーシップという話も少ししたのですが、最後に振り返りとして、探究する学校のリーダーであってほしいというのが私のメッセージです。では今日出てきたキーワードとして探究する学校とはどんな学校かと考えてみると、ワクワクがあり、本質を問い直すクリティカルシンキングやメタ認知。またアンラウン、サーバントリーダーシップ、子ども目線で考える、伴奏者になる、挑戦する、対話する、自ら学ぶ。こういったものが探究する学校で、探究する学校のリーダーなのかなと私も考えながら思っています。なので私自身、これから鎌倉市の教育長になるにあたりこういう考え方で、探究する教育委員会、探究する教育長になりたいと思っていますので、もし共感していただければ是非色々な連携ができればと思っています。すみません、少し時間オーバーしましたけども、いつまでも先生方とお話していただきたいのですが、お昼ご飯もお召し上がりいただいて、また午後の分科会、少し私もご一緒させていただきますのでどうぞよろしく願いいたします。一方的に話してしまいましたが、こんな話でよかったかなと自信は無いのですが、私の講演は以上とさせていただきます。本日はありがとうございました。

本日の校長先生方へのメッセージ・メール

「探究する学校」のリーダーであれ！

＜今日でできたキーワード＞
わくわく、本質を問い直す（クリティカルシンキング、メタ認知）、アンラウン、サーバントリーダーシップ、子供目線で考える、伴走する、挑戦する、対話する、自ら学ぶ…

【高橋洋平氏プロフィール】

- 1982年生。宮城県登米市出身。東北大学教育学部教育政策科学コース卒。父は中学校の校長（前登米市教育長）。
- 2005年文部科学省に入省。初等中等教育企画課専門職、研究振興局振興企画課総括係長、教育改革推進室専門官、私学助成課課長補佐などを歴任。教職員の人事サービスや教育委員会に関する法制度の企画立案、高校授業料無償化制度の創設、第2期教育振興基本計画の策定、私学助成の制度改善など初等中等教育政策を中心に経験。
- 2013年よりカリフォルニア大学バークレー校客員研究員として、カリフォルニア大学のガバナンス、米国の教育委員会制度などについて研究。
- 2016年より5年間福島県に出向。福島県教育庁教育総務課長として、教育委員会全体の総合調整や震災復興（避難指示解除地域での学校再開）などを担当。2019年より知事部局に移り、企画調整部企画調整課長として、県庁内外の総合調整、総合計画・復興計画、復興基金の運用、議会・マスコミ対応などを行う。
- 2021年に文部科学省学校デジタル化プロジェクトチームサブリーダーとして、GIGAスクール構想（児童生徒1人1台端末）の企画・運営支援を行う。
- 2022年文部科学省を退職し、PwCコンサルティング合同会社において、教育チーム（Education Initiative）のマネージャーとして、文部科学省や教職員支援機構、全国の大学・教育委員会に対して、教育のデジタル化・教育データ利活用、教師研修・リスクリング、組織・働き方改革などのコンサルティングに従事している。
- 趣味はランニングと燻製、ときどきサーフィン。

【主な著書等】

- 現代的学校マネジメントの法的論点改訂版（2018年、第一法規）
- カリフォルニア大学の比類なき特徴―自律的ガバナンスと機能別分化の効用―（2015年、日本学術振興会）
- 福島からもらった言葉たち（2021年、福島民友新聞連載）など。



記念講演後の高橋洋平氏を囲んで



次期開催県代表挨拶

岩手県中学校長会

会長 中 屋 豊

次期開催県であります岩手県中学校長会を代表して、一言ご挨拶を申し上げます。

まずは、第73回東北地区中学校長会研究協議会福島大会が開催されますことは、各県からの参加者はもとより、東北地区の中学校教育の充実と発展にとりましても、大変有意義なことであり、依然として新型コロナウイルス感染症の影響が多方面に及ぶ中、開催に向けてご尽力下さいました福島県中学校長会の皆様に心から敬意と感謝の意を表します。

さて、次期大会は、「第75回全日本中学校長会研究協議会岩手大会」並びに「第74回東北地区中学校長会研究協議会岩手大会」を、令和6年10月17日と18日の2日間、岩手県盛岡市において開催することになりました。文部科学省の行政説明、研究題別分科会、記念講演等のプログラムを用意し、記念講演の講師は、銀河系の中心にある巨大ブラックホールの撮影に初めて成功した、国立天文台水沢VLBI観測所所長の本間希樹氏に依頼しております。現在、本県におきましても事務局（実行委員会）を中心に準備を進めておりますが、開催方法については、第69回の秋田大会以来となる参集型で実施する方向で進めています。また、東北地区を中心に全国各地から1,800名の校長先生方に参加していただく予定です。多くの校長先生方と情報を共有し、実りの多い大会となるよう、しっかりと準備を進めて参りたいと思います。

会場となる盛岡市は雄大な岩手山の裾野に広がる「緑豊かな街」であり、北上川、中津川、雫石川の三河川の合流点にある、「清らかな水」に恵まれた街です。ニューヨークタイムズ紙が本年1月に発表した「2023年に行くべき52カ所」に盛岡市がロンドンに次ぐ2番目に紹介されました。城跡や大正時代の「和洋折衷の雰囲気」が残る建造物があり、「散策に最適」の街だとしています。また、こだわりのコーヒーの店、わんこそば、個性的な古書店、ジャズ喫茶なども紹介しています。その通り、わんこそば、盛岡冷麺、盛岡じゃじゃ麺、という盛岡三大麺をはじめ、お菓子や地酒・地ビール等、多種多様な「食」に恵まれた街でもあります。人情に厚く、自然豊かで酒も食べ物も美味しい、そんな岩手県・盛岡の地を堪能していただければ幸いです。

来年の岩手大会で、東北各県の校長先生方とお目にかかれることを楽しみに、重ねて、多くの校長先生方のご参加をお願い申し上げ、そして、岩手県中学校長会会員全員が「おもてなしの心」を持って迎えをお約束し、次期開催県代表の挨拶といたします。



編集後記

第73回東北地区中学校長会研究協議会福島大会が、会津若松ワシントンホテルを会場に、昨年の宮城大会の成果を引き継ぐ「HYBRID型」で開催されました。理事や発表者88名が会津若松会場に集い、さらに795名(申込者)の各校長先生方と会場をオンラインで結ぶなど、多くの皆様に御参加いただきながら盛会に開催できましたことに深く感謝を申し上げます。

本大会は、「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく日本人を育てる中学校教育」をテーマに、冒頭、PwCコンサルティング合同会社マネージャーの高橋洋平様による記念講演、午後は3つの分科会において計6校の校長先生方が実践発表を行い、その後オンラインを通じて全参加者による協議が行われました。「HYBRID型」の利点を生かしながら、本大会の趣旨に沿った有意義な時間を共有することができたのではないかと考えております。この大会で強く心にとめられたことや、熱く語り合ったことを東北各地にお持ち帰りいただき、東北各地の中学校教育の充実の糧としていただければ幸いに存じます。

新型コロナウイルスが猛威を振るう中での開催計画の策定と準備は大変厳しいものがありましたが、昨年の宮城大会の視察により、事務局の運営の様子、オンラインに関わる機器の設置や人員の配置など大変参考にさせていただきました。改めて御支援を賜りました皆様へ心より御礼申し上げます。

結びに、東北地区中学校長会会員の皆様の御健勝と御活躍をお祈り申し上げ、編集後記とさせていただきます。

福島大会実行委員会 総務部会長 会津若松市立第一中学校 高橋 伸明

第73回 東北地区中学校長会研究協議会福島大会役員名簿

◇ 大会会長（東北地区中学校長会 会長）

福島 福地 裕之（福島市立福島第四中学校）

◇ 大会副会長（東北地区中学校長会 副会長）

青森 木村 信一（青森市立浦町中学校）

岩手 中屋 豊（盛岡市立厨川中学校）

宮城 佐藤 亨（大河原町立大河原中学校）

秋田 谷村 格（秋田市泉中学校）

山形 田中 克（山形市立第一中学校）

福島 長谷川浩文（会津若松立第三中学校）

◇ 大会実行委員会

氏 名（学校名・校長会役職）	
実行委員長	長谷川浩文（会津若松市立第三中学校・福島県校長会 副会長・北会津支会 会長）
副実行委員長	板橋 竜男（福島市立福島第一中学校・福島県校長会 事務局長）
	湯田 公夫（福島市立平野中学校・福島県校長会 研究部会長）
総務部会	部会長 高橋 伸明（会津若松市立第一中学校・北会津支会 副会長）
	総務 渡部 朋史（会津若松市立第二中学校） 藤田 信一（会津若松市立大戸中学校）
	庶務 小川 茂樹（会津若松市立第六中学校・北会津支会 副会長）
	古川 雅秀（会津若松市立北会津中学校） 安齋 敦（会津若松市立河東学園）
	情報通信 横山 泰久（猪苗代町立猪苗代中学校） 植村 信（会津若松市立一箕中学校）
	高橋 祐一（会津若松市立第四中学校） 石井 亮一（磐梯町立磐梯中学校）
	経理 玉木 敏彦（会津若松市立第五中学校） 山内 亮（会津若松市立湊中学校）
分科会部会	部会長 板橋 和典（喜多方市立第一中学校・耶麻支会 会長）
	副部会長 佐藤 毅（喜多方市立第二中学校・耶麻支会 副会長）
	鈴木 雅彦（北塩原村立第一中学校・耶麻支会 副会長）
	本多 康夫（喜多方市立塩川中学校）
	部員 五十嵐清人（喜多方市立第三中学校） 佐藤 純一（喜多方市立会北中学校）
	佐久間光児（喜多方市立山都中学校） 星 貴之（喜多方市立高郷中学校）
全体会部会	斎藤 一範（北塩原村立裏磐梯中学校） 園部 毅（西会津町立西会津中学校）
	部会長 坂口 伸（会津美里町立高田中学校・両沼支会 会長）
	副部会長 小関 英紀（会津美里町立本郷中学校・両沼支会 副会長）
	本多 康弘（会津美里町立新鶴中学校・両沼支会 副会長）
	部員 五十嵐真由美（会津坂下町立坂下中学校） 藤井 義朗（湯川村立湯川中学校）
	高橋 哲郎（柳津町立会津柳津学園中学校） 鶴水 達也（三島町立三島中学校）
受付・誘導部会	野口 幸哉（金山町立金山中学校） 土橋 康弘（昭和村立昭和中学校）
	部会長 我妻雄比古（下郷町立下郷中学校・南会津支会 会長）
	部員 室井 正之（南会津町立田島中学校・南会津支会 副会長）
	渡部 学（南会津町立南会津中学校・南会津支会 副会長）
	大内 進矢（南会津町立荒海中学校） 室井 辰生（南会津町立館岩中学校）
オブザーバー	鶴巻 厚保（檜枝岐村立檜枝岐中学校） 伊藤 知雄（只見町立只見中学校）
	熊澤 正人（伊達市立桃陵中学校・福島県中学校長会 副会長）
	早崎 保夫（郡山市立郡山第二中学校・福島県中学校長会 副会長）
	玉澤 淳（いわき市立植田中学校・福島県中学校長会 副会長）
菅野 浩智（福島市立福島第三中学校・福島県中学校長会 庶務）	

第73回
東北地区中学校長会研究協議会福島大会報告

令和5年10月30日発行

編 集
第73回東北地区中学校長会研究協議会
福島大会実行委員会

印 刷
株式会社 アポロ
〒965-0044 会津若松市七日町14-7
TEL (0242) 22-5139



塩屋崎灯台（いわき市）



会津彼岸獅子



うねめまつり（郡山市）